

広報市民リポーターだより  
第3回

# ふくし～一偶を照らして～

リポーター 前 沢 綾 子 (相染沢中岱)

例えば、ひとり暮らしの方へは、掃除や洗濯など日常生活をするうえで本来持っているはずの機能を引き出す手助けを、また、ねたきりの場合は、家族で担いきれない部分を手伝うという具合です。ヘルパーは本人・家族、

今回は前沢リポーターが、福祉事務所のホームヘルパーとして在宅福祉に活躍する皆さん取材、また石川リポーターは、豊かな自然に恵まれ、子供たちの健やかな育成をはかる少年自然の家とその環境をリポートしました。

高齢化が進む今日、これまで以上に「福祉」がいわれられています。ねたきりやひとり暮らしの老人も、ここ数年急速に増えているとのこと。福祉事務所で在宅福祉を担当されている板橋さんからお話を伺いました。

板橋さんたちの仕事であるホームヘルプとは、在宅のねたきり老人、ひとり暮らし老人、身体障害者の方たちそれぞれに、適切な手伝い、手助けをするものです。

または民生委員等の依頼で、福祉事務所の判断によって派遣されます。現在ヘルパーは十一人で、週に二回ほど訪問活動を行っているそうです。



板橋さんから取材する前沢リポーター(左)

ホームヘルプは大変心身の疲れる仕事、時には思いが伝わらないこともありすが、時間をかけて、理解するように努めているとのこと。ぼけ気味の老人の言動には、時折り試されているかのような恐怖感さえ覚えることもあり、いい加減な気持ちは許されず、常に心を引き締めて冷静に取り組んでいる。

うです。疲れる」と言いながらも、その顔にあふれる笑みは、まさに一偶を照らすという言葉のままに感じられました。

ホームヘルプで一番喜ばれるのは入浴です。何度訪問しても打ち解けなかったお年寄りが、ポツリ「ありがとう」と声にしたときの感激は忘れられませんと板橋さん。これは老人が心穏やかに過せるようになったことの現れであり、献身的な介護が通じた明かしでしょう。

## 「自然の家」の四季は招く

リポーター 石川 富 男 (水門前)

多くの人にヘルパーの存在と活動を知ってもらいたい、理解してもらい、ホームヘルプという仕事を身近に感じてほしいと話されました。介護は家族の努力だけでは限界があります。不可能なことを知り、本人、家族のためにも社会的援助を受けることは不可欠なことと思います。本人、家族の努力と社会的援助が相補ってこそ、心身ともに安定した、穏やかな暮しができるのではないのでしょうか。

長根山に浮かぶユニークなお城(少年自然の家)、そして個性的な大文字。この友禅模様のプロポーシオンは、さすがリゾー都市大館のシンボルです。カッコウが初夏を告げる六月十六日、新緑に包まれた「自然の家」を訪ねてみました。

鳳鳴高校から一直線に延びる舗装道路を抜け、突き当たりの広大な運動公園を半周すると、「大館少年自然の家入口」の太文字の看板が目に入ります。つづら折りの坂道を登りつめると自然の家があります。眼下に、長木川をまたいで伸びる七万人都市が一望でき、街並みの鼓動が聞えてきます。「日が落ちて

静まり返ってから眺める夜景は、ダイヤモンドを散りばめたように素晴らしいですよ。」と係員の方が話してくれました。

背後には大館スキー場、秋葉山、鳳凰山と峰が連なり、神秘的な岩神、沢をのんで青く水を湛えた貯水池は無気味なほど静かでした。フィールドワークやオリエンテーリングなどのチェックポイントが雑木林の緑の陰からのぞいています。逆さに滑り落ちそうな急斜面をロープにつかまって下りたり、縄のつり橋で沢を渡ったりと、子供たちの冒険心を満足させてくれそうです。



自然の家を訪ねた石川リポーター(右端)

の家の文字から連想するイメージとは違い、ステキなホテルのように感じました。二百人を収容できる個室、清潔な食堂、憩いの浴場、それにゲームやスポーツができるレクリエーションホールなどがあるほか、自然観察のための器具も用意されています。「自然の家」では子供たちに、日常得難い共同生活を通して、人と人とのふれあい体験の中から新しい発見をしようという目標にしているそうです。

春の一万本桜から紅葉、そしてスキーまで、四季にわたって自然に触れることができ、バラエティに富んだ環境は家族ぐるみの行楽にも適しています。自然の家はもとより、こうした自然に恵まれた郷土を誇りとし、より多くの人たちに愛される街づくりを進めるにはどうしたらよいのか、どうすべきかを考えながら緑の森を出てきました。